

## 【第19回 JAMS 研究大会報告】

### マレーシアの転換点をどう捉え、どう描くか

#### 共通論題(1)「ポスト・マハティール期の方向性:政治・経済の変動とベクトル」から

金子芳樹

第1日目の共通論題セッションは、マハティール時代が終わった後のマレーシアの政治、経済、外交の動きをトレースしながら、何が、いかに変化したか、しつつあるか(していないか)を整理し、その上で同国が進もうとしている方向を探ることを目的として設定された。

強いリーダーシップと明確なビジョンの下に新経済政策 (NEP) を推進・制御し、現在のマレーシアの枠組みと個性を築き上げたともいえるマハティール首相が退いた後、同国がどこに向かうかに衆目が集まった。アブドゥラー、ナジブ両後継政権は、基本的には前政権の路線を継承するとし、抜本的な体制や政策の変更を主張しようとはしなかった。しかし、国内外で変動の波は着実に押し寄せ、変化を促す圧力は予想以上の速さで高まってきたように見える。実際にも、2008年の総選挙結果を象徴として、種々の変動やその兆しが観測できる。

これらの変化は、構造的な転換なのか、一過性の変転なのか、それとも政権の個性なのか。政治、経済、外交の各分野から分け入って、この問いに迫ろうとしたのが同セッションである。

まず、中村正志会員から政治、吉村真子会員から経済、鈴木絢女会員から外交の各分野についての報告があった。報告内容は別項の報告要旨に譲るが、著者は各報告から、ポスト・マハティール期の7年余りの間に、各方面でマレーシアが、一過性とはいえない構造的な変動期を迎えていることを強く印象づけられた。

次に、討論者の小野沢純会員(拓殖大学)から、各報告が提示した変化の内容にさらに踏み込んだ

質問、コメントが寄せられ、報告者との間で次のような議論が交わされた。

政治面に影響を及ぼす要素としてエスニシティ以外に階級的要素の比重が増した。貧富の格差拡大と共に中間層の拡大が目覚ましく、既に4〜5割を占めるともみられる。中間層が様々な面でマルチ・エスニック化を促進しており、長年固定的であった政治構造が流動化している。

経済面では、憲法153条の改正にまで踏み込んだ原則の転換は容易ではないが、新経済モデル (NEW) で NEP のネガティブな面が指摘されているように、アフターマティールアクションの対象の再設定などを含めて、情勢の変化に対応する現実主義的な政策がとられるのではないかと。

外交面では、政権の個性と情勢変化が重なって政策にも変化がみられる。アジアにおける多国間外交への姿勢には不透明な面も多いが、アフリカを対象とした南々協力や TPP などの経済自由化に向けた多国間協力については従来になく積極的な取り組みがみられる。

最後にフロアから、国家としてのマレーシアの今後の方向性について、マルチ・エスニックな面をアピールする重要性や小国としてのソフトパワー発現の必要性などが指摘された。

転換期を迎えているマレーシアで、何が、どのように変わろうとしているのか。視点の設定そのものも含め、各自に向けられた問いといえよう。このセッションが、各分野における今後の分析の一つのヒントになることに期待したい。